

日本英文学会関東支部
第 11 回 (2015 年度秋季大会)
プログラム

日時： 2015 年 10 月 31 日 (土)

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1

アクセス

東急東横線・東急目黒線・横浜市営地下鉄グリーンライン

日吉駅 下車徒歩 1 分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

11:30 —	開場・受付開始 総会 11:40—12:10 (D201)			
研究発表 12:20 13:20	第1会場 J441	第2会場 J442	第3会場 J443	第4会場 J444
	言語、政治、記憶—— ハロルド・ピンター <i>The Caretaker</i> と <i>The Homecoming</i> に おける禁忌の問題 (発表者) 東京大学大学院 奥畑 豊 (司会) 東京工業大学教授 谷岡 健彦	ウィンダム・ルイスと シャーウッド・アンダ ソンと非白人の眼—— <i>Paleface</i> と <i>Dark Laughter</i> の人種的不安 (発表者) 中央大学教授 中村 亨 (司会) 津田塾大学准教授 秦 邦生	『ドラキュラ』における 文明と怪物 (発表者) 成立学園中学高等学校 常勤講師 奥野 元子 (司会) 専修大学准教授 大久保 謙	故郷を物語ることの 難しさ——ロバート・ ルイス・スティーヴン ソンの吉田松陰伝再考 (発表者) 慶應義塾大学大学院 守重 真雄 (司会) 和光大学教授 宮崎 かすみ
部門別 シンポジウム 13:30 15:30	英米文学部門シンポジウム (D201) カリブ・アフリカ文学と「民衆」 (司会・講師) 一橋大学教授 中井 亜佐子 (講師) 東京理科大学専任講師 吉田 裕 (講師) 東京女子大学教授 溝口 昭子		英語教育部門シンポジウム (D202) 音読の功罪と音読教材としての 文学テキスト (司会) 東京理科大学専任講師 北 和文 (講師) 専修大学教授 田邊 祐司 (講師) 上野学園大学准教授 久世 恭子 (講師) 東京大学教授 斎藤 兆史	
メイン・ シンポジウム (D201) 15:45 17:45	日本・原爆・英米文学 (司会・講師) 東京大学教授 田尻 芳樹 (講師) 慶應義塾大学非常勤講師 脇田 裕正 (講師) 筑波大学准教授 齋藤 一			
18:00 20:00	懇親会 (生協食堂 食堂棟1階)			

開場・受付開始 (11:30 より 第4校舎A棟4階にて)

12:20-13:20

【研究発表】

第1会場 (J441 教室)

(発表者) 東京大学大学院 奥畑 豊

(司会) 東京工業大学教授 谷岡 健彦

言語、政治、記憶

——ハロルド・ピンター *The Caretaker* と *The Homecoming* における禁忌の問題

本発表では、英国の劇作家 Harold Pinter (1930-2008) の *The Caretaker* (1960) 及び *The Homecoming* (1965) を採り上げ、そこに見られる「語りえない」禁忌としての記憶について、主に「アウシュヴィッツ後」の世界におけるホロコーストを巡る記憶の政治学と結びつけて検討する。Pinter はユダヤ人でありながら絶滅収容所の恐怖を直接的に表象しようとはしなかったが、彼の幾つかのテキストには、登場人物の曖昧な言説の背後に、しばしば彼らが語りえない真実——或いは、彼らが他者へ語ることを拒否している記憶——が存在することが暗示されている。例えば *The Hothouse* (1958/1980) にはそうした語りえない記憶を「語ろう」とする試みが言語そのものの自壊により挫かれてしまう様子が描かれているが、この発表では一見ホロコーストとは無関係に思える *The Caretaker* と *The Homecoming* において、「語りえない」禁忌としての記憶が、まさに「語られない」ことによって——もしくは逆に「語られて」しまうことによって——もたらされる作用を中心に分析し、共同体の団結を維持する装置として機能する“unspeakable”な記憶それ自体の孕む政治性について論じる。

第2会場 (J442 教室)

(発表者) 中央大学教授 中村 亨

(司会) 津田塾大学准教授 秦 邦生

ウィンダム・ルイスとシャーウッド・アンダソンと非白人の眼

——*Paleface* と *Dark Laughter* の人種的不安

本発表では、ウィンダム・ルイスが同時代のプリミティビズムの流行を批判して書いた評論 *Paleface* (1929) と、彼がその評論の中で主な攻撃の標的にしているシャーウッド・アンダソンの小説 *Dark Laughter* (1925) との関係を検討する。ルイスの文学における人種の問題を検討する研究は近年増えつつあるが、*Paleface* で露わにされているルイスの有色人種、特にアフリカ系アメリカ人に対する人種観はほとんど検討されていない。一方 *Dark Laughter* は失敗作として作品自体が無視されてきた感がある。

この二人の著作の検討を通して明らかにしたいのは、二人の表面的な対立とは裏腹に、*Dark Laughter* が鮮烈に描き出す人種的不安を *Paleface* が引き継ぎ反復しているのではないか、ということである。その不安とは有色人種の台頭への不安、さらには白人の言動がそれ以外の者の眼から批判的に観察され、意味づけられることへの不安である。

W・E・B・デュボイスなどのアフリカ系作家達との二人の関係も踏まえ、この問題を考えてみたい。

第3会場 (J443 教室)

(発表者) 成立学園中学高等学校常勤講師 奥野 元子

(司会) 専修大学准教授 大久保 譲

『ドラキュラ』における文明と怪物

ドラキュラ伯爵は単なる怪物なのか。ヴァン・ヘルシングは本当に医学、科学における世界的権威であり人格者であるのか。ルーシーを殺害したのは誰か。なぜ、伯爵は退治されるのか。ドラキュラ討伐隊のリーダーがイギリス人ではないのはなぜか。

まずは、ドラキュラ伯爵とヴァン・ヘルシングに焦点を当てルーシーの死に彼らがどのように関わっているのかを考察し、彼らが単なる悪と善ではなく、お互いに近づきつつある存在であることを読み取っていく。さらに、19世紀末の諸外国との関係とホモ・ソーシャルなヴィクトリア朝社会を脅かすものを考察することで、文明大国イギリスが抱えていた怪物の存在を明らかにし、上記の疑問に答えていく。

第4会場 (J444 教室)

(発表者) 慶應義塾大学大学院 守重 真雄

(司会) 和光大学教授 宮崎 かすみ

故郷を物語ることの難しさ

——ロバート・ルイス・スティーヴンソンの吉田松陰伝再考

世界で初めて吉田松陰の伝記を著したのが、日本人ではなくスコットランドの小説家ロバート・ルイス・スティーヴンソンだという驚くべき事実は意外と知られていない。まして、灯台建築を介したスティーヴンソン一家と日本の近代化の結びつきなど国内外問わず認知されていない。スティーヴンソンは松陰伝 “Yoshida-Torajiro” (1882) にて、一家がその近代化に貢献した日本を進歩史観的に描いているが、故郷スコットランドの進歩史観に対する彼の批判的態度を考えると、このことは奇妙に感じられる。この矛盾が生まれる原因を解析する上で松陰伝は重要な手がかりとなる。本発表では、長州による尊王攘夷運動と、スコットランド史の分岐点である 1745 年のジャコバイ

トの乱を比較分析し、両者の構造的類似と相違の明確化を「中心一周縁」の理論を援用しながら行い、その上でスティーヴンソンが故郷の歴史を扱った小説 *Kidnapped* (1886) において「描きえた歴史」の限界性と「描きえなかった歴史」の可能性を提示したいと考えている。

13:30-15:30 D201 教室

【英米文学部門シンポジウム】

カリブ・アフリカ文学と「民衆」

(司会・講師) 一橋大学教授 中井 亜佐子
(講師) 東京理科大学専任講師 吉田 裕
(講師) 東京女子大学教授 溝口 昭子

20世紀カリブ、アフリカ地域の文学者たちの多くは、植民地化の暴力に抗う集合的主体 (people, the masses) を表象、概念化、批判、あるいは歴史化する作業に取り組んできた。本シンポジウムでは、カリブ・アフリカの英語文学を英米文学への従属関係において論じるのではなく、「民衆」(あるいは「大衆」という問題意識が共有される一つの文学の系譜として議論してみたい。今日の世界文学研究において支配的な中心一周縁モデルから脱し、世界文学を語るあらたな視座を提示できればと願っている。

■ 革命と日常——C・L・R・ジェームズにおける「大衆」の概念

中井 亜佐子

ポール・ビュールは伝記『革命の芸術家』のなかで、C・L・R・ジェームズの「ひっきりなしにテレビを見ている」日常生活のあり様を折にふれて描いている。ハリウッド映画を評価し「マス・カルチャー」をけっして否定的にはとらえなかったジェームズにとって、「大衆 (the masses)」は歴史を動かす主体であったし、みずからもまた大衆の一部であった。

ジェームズにおける「大衆」の概念にかんして、本発表では、1) 「大衆」の階級性、ジェンダー性、2) 民衆／大衆運動とナショナリズムの関係、3) カリブ・アフリカにおける革命や独立運動といった「できごと」と大衆の「日常」のあいだの相互関係、の三点を中心に考察する。トリニダードの最下層の女性たちの日常を描いた初期小説からハイチ革命史『ブラック・ジャコバン』(1938年)、60年代以降の文化批評にいたるまでの思想の軌跡を、イギリスのニューレフトの思想などとも比較しつつ再検証したい。

■ 困難な自律の方へ——ジョージ・ラミング中期作品試論

吉田 裕

ジョージ・ラミングは理論的な側面から汎カリブ的な集合性を歴史化することに取り組んできた。

とりわけ、第一小説 *In the Castle of My Skin* (1953)において、時に晦渋とも言う詩的散文とともに提示された“*My People*”という集合性は、早くはリチャード・ライト、近年ではグギ・ワ・ジオンゴによって、対自的かつ戦闘的な民衆の登場として評価されてきた。ただし、その後の *Of Age and Innocence* (1958) および *Season of Adventure* (1960)についての評価をめぐっては、この概念の変化が検討し尽くされてきたとは言えない。本発表では、初期作品において提示された集合性が、これらの作品では、ナショナルな自立への予兆とその後の自律の困難を引き受ける書記へと変化を遂げていることを論じたい。

■ 「国民未滿」から対自的民衆へ——H・I・E・ドローモの作品を中心に

溝口 昭子

数々のアパルトヘイト根幹法が施行された 20 世紀前半の南アフリカでは、アフリカ系作家が描出する「民衆」は大きく変貌をとげる。最初「民衆」は大英帝国臣民もしくは「国民」として選挙権などの平等な権利を享受すべき存在、あるいは、当時の進歩主義を反映し、既に教育を通じその諸権利を享受していたアフリカ系知識人が啓蒙すべき前近代的「大衆」として捉えられていた。それが 30 年代後半からは、アパルトヘイト体制下で諸権利を剥奪され「二級市民」となった作家とその周縁性を共有する対自的な存在として立ち現れ、後の黒人意識運動に繋がっていく。本発表では、この変遷について、汎アフリカ主義の影響を踏まえながら、20 世紀初頭の作家ソル・プレーキ、そして黒人意識運動の先駆けとなった作家ピーター・エイブラハムズに言及しつつ、文学史的にはその間に位置し、その変遷が作品に深く刻まれた H・I・E・ドローモを中心に検証していきたい。

13:30-15:30 D202 教室

【英語教育部門シンポジウム】

音読の功罪と音読教材としての文学テキスト

(司会) 東京理科大学講師 北 和丈

(講師) 専修大学教授 田邊 祐司

(講師) 上野学園大学准教授 久世 恭子

(講師) 東京大学教授 斎藤 兆史

「英文を声に出して読んでから逐語的に日本語に訳す」という学習法は、実用的な英語力を養えない、と日本の英語教育の元凶として非難されている。実は、この非難の対象となっているのは「逐語的に訳す」ことであって、「声に出して読むこと（音読）」自体はむしろ効果的な学習法として近年さらに英語教育学の分野でも注目を浴び、まさに「音読ブーム」とも言われている。しかしな

がらこの音読こそ、その意義をきちんと理解し、正しい方法と適切な教材を用いて実践されないと百害あって一利なしとも言えよう。

本シンポジウムでは、①英語教育学的見地からの音読、②文学テキストを教材とした大学における音読の実践例、③教材としての文学テキストという流れで各講師が論じ、最後に意見交換が行われる。このシンポジウムが、英語教育に携わるフロアの先生方にとって「音読」について改めて考え直す良いきっかけとなることを期待している。

■ 英語教育学における音読——基本的な考え方と文学との接点

田邊 祐司

日本の英語指導・学習法の中で、音読ほど教室の内外で長きにわたり広く実践されてきた手法は数少なからう。にもかかわらず、これに関しての理論体系のようなものは現在、緒に就いた段階で、それまでは個人的な取り組み・経験談の類が英語教育界に流布していたというのが実態であろう。

以上から、わたしの担当では、まず英語教育の流れにそって、音読に関する主要な言説、教育実践を振り返りながら、音読賛成と反対の各々のポイントを整理する。次に、現行の中・高・大に共通する音読指導・学習をめぐる現状、問題点について簡単にふれる。最後に（時間が許せば）テーマである文学とのインターフェイスに関しての愚見を呈するつもりである。

■ 大学英語授業における音読の実践例：文学教材を中心に

久世 恭子

本発表では、大学の英語授業における音読の実践例を紹介し、その考察をもとに問題提起を行う。音読は、近年、日本の英語教育においてコミュニケーションを重視した指導法の1つとして注目されるようになってきたが、これまで主として中等教育の場で取り上げられることが多かった。そこで、今回は大学の英語授業の中に音読を取り入れた事例のうち、特に文学教材を使ったものに注目し、その授業展開や学習者の反応などを報告する。そして、いくつかの問題—音読は何の能力を伸ばすために行うのか／他の言語活動、例えば、訳読などとの関係はどのようなものであるか／音読を実践する上でむずかしいのはどんな点か／音読にはどのような教材が適しているのか、文学が向いているとしたらどんな点が良いのか、など—を提起し、それらをきっかけに本シンポジウムでの議論を進展させたいと考えている。

■ 声に出して読みたい文学テキスト

斎藤 兆史

言語教育において音読が重要な学習項目であることは多くの語学教師が認めるところであろう。私は、本発表においてとくに音読の効果を証明しようと試みるつもりはなく、その認識を前提とし、同じ音読をさせるのであればその教材としては名文と呼ばれる文学テキストが向いている、との論を展開したい。名文が音読教材として優れている点としては、何より語彙、文法、リズム、談話構造などが緻密に計算され、重要な学習項目が凝縮された文章であることが挙げられるが、さらに母

話者の多くが母語習得のどこかで学習し、その言語知識や言語文化の一部に組み込まれたテキストであることも重要である。本発表においては、どのような文章が文学の名文と考えられるか、それを用いて音読を实践あるいは指導する際にどのような点に気をつければよいかを論じ、他の講師と意見交換をしたいと考えている。

15:45-17:45 D201 教室

【メイン・シンポジウム】

日本・原爆・英米文学

(司会・講師) 東京大学教授 田尻 芳樹
(講師) 慶應義塾大学非常勤講師 脇田 裕正
(講師) 筑波大学准教授 齋藤 一

戦後 70 年が経ち、「安保関連法案」が深刻な問題を提起する今年は、先の戦争に関して改めて深く考え直さねばならないことが多い。英文学の徒という立場からどのような介入が可能であろうか。準備委員会から与えられた「日本と英文学」という枠組みの中で、私たちは先の戦争でも突出した経験である、広島・長崎の原爆について新しい角度から考察することを選んだ。それはいわゆる「原爆文学」の作家と英文学、英米批評の関係のみならず、英文学の研究者の原爆体験に対する態度をも対象とする。その過程で、被爆という破局的経験を受け留めることと、私たちの日ごろの英文学研究の営みの関係について新たな洞察が生まれることを願う。

■ 原爆文学と〈トラウマ〉、〈証言〉の問題

田尻 芳樹

近年の英米批評において見逃せない潮流が、トラウマと文学の関係を探究するもので、いわゆる「トラウマ理論」は1990年代に Cathy Caruth が新しい枠組みを提示して以降盛んだし、小説をトラウマとの関係で読み直す試みも陸続と現われている。それらは、おおむねホロコーストという破局的体験への内省と深く結びついている。翻って我が国における破局的体験といえる原爆被害は、さまざまな意味でホロコーストと問題を共有しているが、原爆文学を新しい英米批評との関連で読み解く試みはそれほど多くない。本発表では、大田洋子、林京子らのテキストを、特に〈トラウマ〉、〈証言〉などの問題系から考察し直し、一つの架橋の試みとしたい。

■ 原爆あとの不思議な眺めのなかに——『ガリバー旅行記』と原民喜の翻訳

脇田 裕正

最晩年の原民喜にとって『ガリバー旅行記』は、「陰鬱」で「何だか痛ましい気持ちさえしてくる」ものだった。「何かぞっと厭なものかひびいて来ます」とさえ言う。にもかかわらず原は『ガ

リバー旅行記』の翻訳に没頭し、その完成を待って自死したのだった。『ガリバー旅行記』の何が原を翻訳に駆り立てたのかは判然としない。しかし『ガリバー旅行記』の翻訳によって原は「原爆あとの不思議な眺め」を思い出してしまう。つまり翻訳を通して過去のトラウマが回帰してしまうことになる。『ガリバー旅行記』の翻訳によって原は、結果的に、「夏の花」を初めとした実作と同様、「原爆」という極限の出来事に対峙することになるのである。原民喜訳『ガリバー旅行記』は、原の詩や小説に比べて論じられることは少ない。本発表では、原にとって『ガリバー旅行記』の翻訳が「原爆」という極限の体験を考えるうえでいかに重要なものであったのかを検討することで、最終的に、原にとって翻訳が作家としていかに重要な行為であったのかを明らかにしていきたい。

■ 被爆体験と「研究」——清水春雄について

齋藤 一

ウォルト・ホイットマン研究者の清水春雄（1903-）は、（40歳を過ぎて進学した）広島文理科大学在学中に広島市で被爆した。その経験について、清水は1955年（学生新聞のインタビュー記事）と1986年（岐阜女子大学退職のあいさつ）で述べている。特に後者のあいさつでは、自らのアメリカ文学研究を、自ら経験した太平洋戦争と被爆体験と関係づけている。ただし、清水は、著書『ホイットマンの心象研究』（1957年）と『ライラックの歌』（1984年）にまとめられている研究論文においては、全く被爆体験について触れていない。つまり、清水は、自分の研究論文・著書の読者には、自分の研究の背後に被爆体験があることを知られたくなかったと推測できるが、他方、清水は研究生生活の最終局面で、自分の研究全体を被爆体験に関係させる決断をしたとも言える。本発表では、アメリカ合州国の文学と文化を研究することと、その文学と文化を生み出した国が落とした原子爆弾によって被爆したことを、清水はどのように接続しようとしていたのかについて述べつつ、1945年以降の核時代における日本のアメリカ文学「研究」のあり方について考えてみたい。

懇親会（18:00-20:00）

会場 慶應義塾大学 日吉キャンパス 食堂棟 1階
生協食堂

会費：4,000円（学生2,000円）

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

キャンパス・マップ



- ② 第4校舎A棟の4階 J441～J444：研究発表、J445：控室
- ④ 独立館2階 D201：総会、英米文学部門シンポジウム、メイン・シンポジウム
 〃 D202：英語教育部門シンポジウム
- ⑧ 食堂棟1階 生協食堂：懇親会

会場アクセスマップ

最寄り駅から

- 東急東横線・東急目黒線・横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅 徒歩1分
 (東急東横線の特急は日吉駅には停車しません)

